

仕上材の違いによる住居床のヒエラルキー感に関する研究
—履物および姿勢との関係に着目して—

正会員 ○ 矢島 規雄*1
同 岩井今朝典*2
同 直井 英雄*3

■研究目的■

従来、わが国の住宅においては、各部屋に対する格の意識や生活様式などにうまく対応するように住居床の段差や仕上材などが決められてきたものと考えられる。住居床に対するそのような心理的な序列の感覚をこの一連の研究では「ヒエラルキー感」と呼んでいる。ところが、近年の住宅においては、伝統的な形式や寸法より、個人の好みや実用性、コストなどを重視した設計が増えてきているように見受けられ、場合によっては、心理的な違和感を生ぜしめる例も少なくはない。そこで本研究では、これまでの研究を土台として、現代日本人が潜在的に持つ住居床に対するヒエラルキー感を探るため、その感覚が典型的にあらわれるものとして、「住居床仕上材と部屋・履物・姿勢との組み合わせの相性」を取り上げ、実験を通してその傾向を定量的に把握することを目的とした。合わせて、この感覚に生じた個人差と個人の属性との関係についても検討を加えた。

■「住居床仕上材と部屋・履物・姿勢との組み合わせの相性」に関する実験■

〈実験方法〉

住居床仕上材・部屋・履物・姿勢の各項目について、表2に示す項目を設定し、大学生16人(男:14人、女2人、平均年齢24.8才)を対象に、実際にその仕上材上でそれぞれの組み合わせの相性について、違和感の有無を問う実験を行い、得点化した。

〈実験結果及び考察〉

実験結果全体を数量化一類にかけたが、はっきりした傾向は現れなかったことから、日本人の感覚として、各仕上材にはそれぞれ適材適所があり、どんなところでも履物で許容するような仕上材はないことがわかった。そこで各仕上材別に部屋・履物・姿勢との組み合わせの相性を実験結果から見てみたところ、例えば畳では、図1に示すように違和感の小さいものはAの部屋分類の素足や靴下だけでその他は違和感が大きく、部屋分類、履物に関して、ごく限定する傾向が見られた。次に仕上材と履物の組み合わせで3つの部屋分類のうち、それぞれの仕上げ材で違和感が最も小さいものを選び出し、比較してみた。図2を見ると、畳、絨毯、板、クッションフロアは履物Iで違和感がなく(畳—スリッパは除く)、履物IIで違和感があり、P

表1 実験項目および分類

住居床仕上材	部屋			履物	姿勢
	A	B	C		
畳 絨毯 板 クッションフロア Pタイル タイル モルタル	居間 座敷 個室 寢室	食堂 台所 脱衣所 洗面所 廊下	玄関たたき バルコニー	I 素足 靴下 スリッパ サンダル 運動靴 革靴	立位 椅座位 平座位1*1 平座位2*2 臥位

*1 平座位1・・・クッション等を介して座る
*2 平座位2・・・直接座る

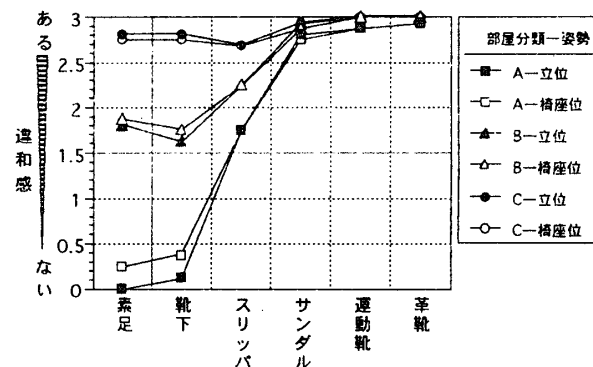


図1 実験結果平均値(畳)

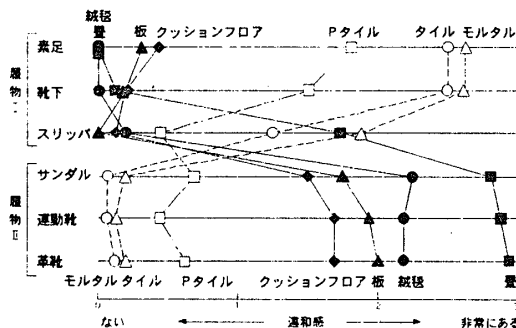


図2 各仕上材と履物の相性(立位—各最小違和感)

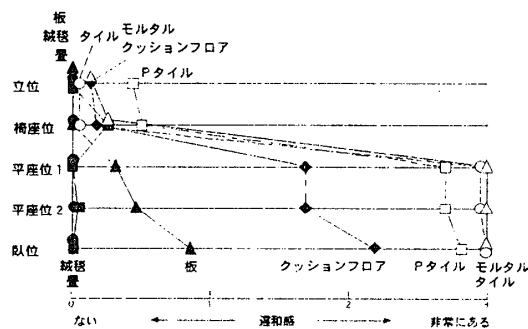


図3 各仕上材と姿勢の相性(各最小違和感)

A study on Japanese hierarchical sense to dwelling floor
by finishing materials
concerning the relationship with footwear and human posture on floor

Yajima Norio et al

タイル、タイル、モルタルに関してはその逆の傾向がよみとれる。(Pタイル・スリッパは除く)。同様に姿勢ごとに比較してみたところ(図3)、立位や椅座位では仕上材の違いでの相性のよし悪しは特になが、平座位1、平座位2、と床に近づき、接触が大きい姿勢になるにつれ、板、クッションフロア、Pタイル、タイル、モルタルでは、違和感が増している。次に、実験の結果を「住居床仕上材に対する格の序列感」との相性関係で考察を行う。今回の被験者の「住居床仕上材に対する格の序列感」を過去の研究方法と同様にシェッフエの一对比較法で調べた。被験者の「住居床仕上材に対する格の序列感」の調査結果は、過去の結果とほぼ同様であり、その感覚の平均に変わりがなことが再度確かめられた(図4)。この調査結果をもって実験結果をみると、格の上下感がはっきりしているものほど、履物や使用する部屋を限定し、格が中位のものには汎用性がある傾向が見られる。

個人差に関する検討

〈検討方法〉

住居床のヒエラルキー感と関係があると想像される項目についての各被験者の属性を調べその属性と実験結果を比較する方法と、実験結果と仕上材に対する格の序列感のアンケート結果について、被験者によりクラスター分析を行い、各グループの傾向を検討する2つの方法をとった。

〈実験結果及び考察〉

個人の属性との関係で例えば、図5は「住居床仕上材と部屋・履物・姿勢との組み合わせの相性」の実験で被験者を自宅の居間が畳の人と絨毯の人に分け、実験における畳と絨毯の評価を比べたものである。両者で畳に対する評価に違いはないが、絨毯の履物IIで若干差がでており、経験外の仕上げ材と履物の組み合わせに関して、絨毯では日常生活での経験に影響を受けるが、畳にはそれを越えた性質があることがうかがえる。図6、7はクラスター分析の結果であるが、格の感覚のグループ分けをあげると、それぞれの仕上材の格の上下間が大きいグループAと7つの仕上材およそ3段階に分かれているグループB、他と比べだいたい順位が入れ替わっているグループCとなり、感覚の個人差の特徴があらわれた。

まとめ

住居床仕上材と、それを使用する部屋、その仕上材での履物、姿勢との組み合わせに対して日本人が持つ感覚には、強い相性関係が見られる。また、今までの経験外の仕上材の使い方に関しては、それぞれの日常生活に影響を受け、やや否定的な感覚を持つこともあるようである。なお、本研究は平成7年度東京理科大修論生福田仁美氏と卒研生佐藤昌氏、植松一弘氏の協力を得た。ここに記して謝意を表す。

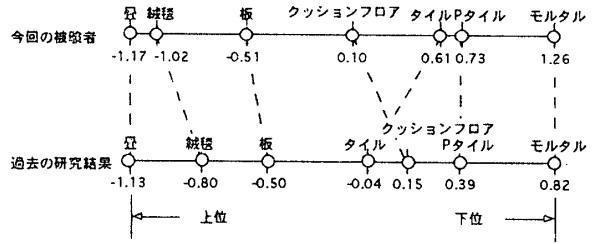


図4 過去の研究における序列感との比較

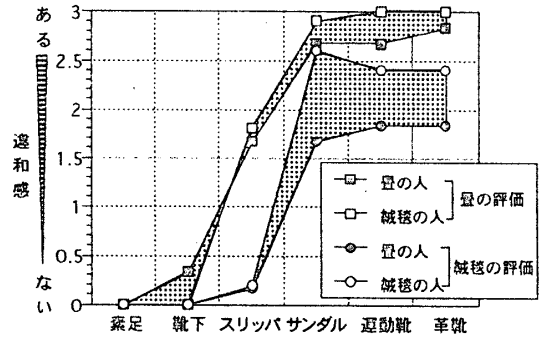


図5 自宅居間が畳の人と絨毯の人との比較 (部屋分類A-立位)

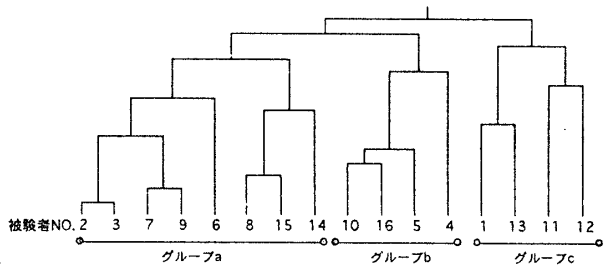


図6 「仕上材に対する格の感覚」被験者クラスター分析

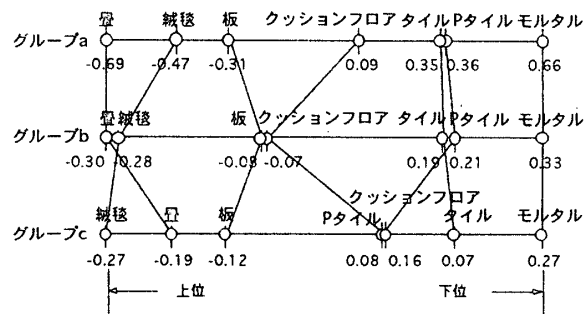


図7 クラスター分析各グループの序列感の比較

【参考文献】

- 1) 川村かおる：仕上げ材料の違いによる住居床のヒエラルキー感に関する一分析；日本建築学会大会学術講演梗概集 1993
- 2) 岡光美代：仕上げ材料の違いによる住居床のヒエラルキー感について(2) -ヒエラルキー感に関する追加検討及び床段差との関係に関する検討-；日本建築学会大会学術講演梗概集 1994
- 3) 福田仁美：玄関上り框部分の床材料及び段差寸法により生ずる違和感に関する実験；日本建築学会大会学術講演梗概集 1995

* 1 東京理科大学大学院・工修
* 2 東京理科大学助手
* 3 同大学教授・工修

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Eng. Science Univ. of Tokyo, M.Eng
Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Eng. Science Univ. of Tokyo.
Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Eng. Science Univ. of Tokyo, Dr.Eng